

## *Havelok the Dane* の二人称代名詞に関して

佐藤哲三

### 序論

現代英語の you は主格（単数・複数）と目的格（単数・複数）の4役をこなしているが、古英語は、それぞれ þū, þē, gē, ēow, 中英語は thou, thee, ye, you と独自形を持っていた。二人称代名詞の形態上の単一化の過程は、歴史を遡ればすぐにわかるが、その長い移行期間にそれぞれがどのような意味合いで使用され、結果的に単数形は消滅し複数形の斜格（あるいは対格と与格を含んだ目的格）の you が他の機能をも果たすようになった理由を調べるのも興味深いものがある。本論では、その一環として二人称代名詞の発達過程を概観した後、北中部方言で1300年頃書かれた英雄叙事詩 *The Lay of Havelok the Dane*<sup>1)</sup> [以下、Havelok] に現れる二人称代名詞の用例を全て調査し、単数形（thou とその屈折形）と複数形（ye とその屈折形）の意味・用法、特に、Havelok において二人称斜格複数形 you の主格使用があるのか、それとは逆に二人称主格複数形 ye の斜格（単数・複数）使用はあるのか、また、「敬意」の複数形の使用範囲はどうか、さらに、呼び掛け語や命令法が二人称代名詞の使用に影響を与えるのかどうかを明確にしたい。

先行研究としては故・小林智賀平博士の論文<sup>2)</sup>があるが、同氏の説に全く問題はないであろうか。例えば、同一場面での単数形と複数形の交代の実態はどうか、あるいは、一人称主格単数形の古形 ic, ich と新形 I, y が二人称代名詞の使用に実際どの程度影響を及ぼしているのかといった問題である。同論文は未発表に近かったので、これらの議論は全くなされてこなかった。本論文では、Havelok における単数形と複数形の意味・用法を論じる過程において、小林論文の問題点にも触れたい。他の類似の研究として、菊池清明氏<sup>3)</sup>や Shimonomoto 氏<sup>4)</sup>のそれぞれの論文があるが、この両論文とも大いに参考にして論を進めたい。

なお、テキストは、小林博士が使用されたのと同じ Skeat, W. W., ed. *The Lay of Havelok the Dane*. 2nd ed. rev. by K. Sisam. Oxford: Clarendon Press, 1915; imp. 1967. を使用することにするが、比較のため、French 版と Smithers 版も参照する。

### I 二人称代名詞の発達と用法

ここでは、二人称代名詞の各々の発達過程とその意味・用法を確認しておこう。

#### 1) thou<sup>5)</sup>

二人称主格単数形。OE. ðū, þū → ME. þū, þou, þow → ModE. thou と発達する。ME 期に

次第に複数形 *ye* (主格) および *you* (目的格) に取って代わられるようになる。その複数形は、初めは目上の人に呼び掛けるときに、後には同等の人に対しても用いられるようになったが、目下の人に呼び掛ける際は、単数形が長い間使用された。そして、18世紀後半に *thou* は標準語から廃れ、それと共に *you* が唯一の二人称代名詞となった。

この単数形 *thou* は、Quaker 教徒の間では長い間使用されていた。方言によっては、親子に向かってや、親しい間柄の同輩同士でも使われるが、他の場合は *rude* とされている。また、一般の日常語では、神やキリストに呼び掛けたり、説教、詩、頓呼法、また調子の高い散文で呼び掛ける場合でも *thou* を使う。

なお、ME では、しばしば *artow* (= *art thou*), *hastow* (= *hast thou*) のように ‘-t’ で終わる動詞または助動詞が *thou* と直結すれば、*þ* (= *th*) はこの *t* の中に吸収された。また、語頭の *þ* も、*s*, *t*, *d* の後では、*hast thou* → *hauis tu* のように *t* となった。この膠着形は *Havelok* にも現れる。

## 2) *thee*<sup>6)</sup>

二人称目的格単数形。OE. *þē* → ME. *þē*, *tee* → ModE. *thee* と発達する。

## 3) *thy*<sup>7)</sup>

二人称所有格単数形。OE. *þin* (属格単数形及び所有形容・代名詞) → ME. *þīn* (属格単数形), *þī*, *þīn* (所有形容・代名詞) → ModE. *thy* と発達する。

## 4) *thine*<sup>8)</sup>

二人称所有代名詞単数形。OE. *þīn* → ME. *þīn* → ModE. *thine* と発達する。

## 5) *ye*<sup>9)</sup>

二人称主格複数形。OE. *gē* (強意形 *gē*, *gīe*) → ME. *ye* → ModE. *ye* と発達する。OE, ME 初期には主格複数の働きに限定されていたのだが、*thou* の項でも述べたように、ME 期の13世紀になると、主格単数としても使われるようになった。この用法は *Havelok* にも見られる。当初は、主として上流社会に限られていて、敬意を示して上位者に呼び掛ける場合に使われた。しかし、一般的にいうと ME 期中、個人の呼び掛けとしては *ye* よりも *thou* の方があらゆる場合において普通である。したがって、単数形と複数形の使い分けが、即ち話し手と相手の身分関係を示すとは限らないのである<sup>10)</sup>。この用法は現代方言で生きていて、‘*ee*’ の形で疑問文や命令文で *Dee* (= *Do ye*) のように使われる。また、目的格にも *ye* を ‘*thee*’ の代わりに *Oi* (= *I*) *tell ee* のように使う。

さて、15世紀になって *you* が *ye* に代わり、主格にも使われるようになると、*ye* がその逆に目的格単数及び複数として使われるようになった。しかし、主格としては、*ye* が16世紀半ばまで支配的であった。その後は *you* が主格として急速に浸透するが、1611年の欽定訳聖書の

古風な言語では *ye* が主格として、依然、圧倒的多数を占めている。これに対し主格 *ye* を斜格（ここでは目的格）に用いることはまれであった。その場合もおそらく *you* の弱化であろう。

6) *you*<sup>11)</sup>

二人称目的格複数形。OE. *eow* → ME. *eow*, *you* → ModE. *you* と発達する。*you* は、本来、対格・与格複数形である。14世紀中には、主格 *ye* の代役として使われはじめた。この用法は *Havelok* には見られない。しかし、この時期でさえも、どの階級の人々も単数人に呼び掛ける場合は単数形を使用するのが自然であった。1600年頃までには、*ye* に代わって *you* の方が主格としてよく使われるようになった。また *you* は、14世紀には時として目的格単数形 *thee* と主格単数形 *thou* の代役も果たした。これらの用法も *Havelok* にはない。これは、元来、目上に呼び掛ける際に「敬意」を示すのに使われたのだが、後で同輩に対しても使い、ついには一般に広く使われるようになる。このようにして *you* は二人称主格と目的格の単数形と複数形として広く使われるようになった。

7) *your*<sup>12)</sup>

二人称所有格複数形。OE. *eower* (属格複数及び所有形容・代名詞) → ME. *eower*, *your* → ModE. *your* と発達する。用法の変化は、*you* に準じる。

8) *yours*<sup>13)</sup>

二人称所有代名詞複数形。発達過程と用法変化は *your* に準じる。

9) *yourself*<sup>14)</sup>

二人称再帰代名詞。16世紀に単・複の区別を明確にするために複数形 *yourselves* が現れるまでは、複数形の代役も果たした。*Havelok* に出てくる *yuself* (ll. 2425, 2595) がそうである。もちろん、*thysel* もあるが、*Havelok* には出てこない。ME 期に、初期の主格形 *3e selfe* と対格・与格形の *eow selve(n)* や *3ousel* に取って代わって *3our self(e)* や *3our selven* 等が全ての格に使われた。*ye*, *you*, *your* と同じように「敬意」の複数として単数人に対しても使用された。

ここで、複数形に「尊敬」の念が表れ、単数形に「親密さ、不満、強い感情」が表れるのは何故か考察しておこう。この件に関して、小林博士<sup>15)</sup>の示唆に富む説明があるので要約して紹介したい。

特定の個人を指すのに複数形を使えば、多数人の中の一人を指すことになるので、「特定一人指示機能」をぼやかしてしまう。このぼやかしは、下位者が上位者に対して多少とも抱く遠慮、直視回避意識、つまりは曖昧模糊主義をとることと一致する。換言すれば、下位者がこのような指示機能ないし意味領域の広がりすぎた複数形 (*ye*, *you*, etc.) を使えば、この曖昧模糊たるかすみが被指示者への敬意を助長する。まとめて言えば、複数形の敬意表現機能は、

多数→間接, 曖昧性→婉曲語法による敬意表現というように発達した。一方, 単数形の方は, 指示機能の対応が特定の一個人に限られるから, 指示が明確で容易である。ここに親しさ, なれなれしさという要素が入ってくる。さらにあまりに指示が容易であるなら, いわゆるなれすぎて, やがてそこに相手に対する軽侮の念が入ってくる。そして, 長い間特別の副次的意味, 感情的色彩が伴って使われていくうちに, この種の単数形には何か強い感情が必ず意味として加わる。つまり, 単数形はまず直接指示ともいうべき容易さをもつから, 親しさやなれなれしさを表しやすい。そして, ついには相手を馬鹿にし, 軽蔑する。このように曖昧性がなければ, 感情は激しく, 強烈な感情がそこに表れてくる。

## II 二人称代名詞一覧

本章では, *Havelok* に出てくる二人称代名詞を場面ごとに分けて一覧表にして提示する。この List の見方は次のとおりである。まず, 左端の欄の数字は Speaker (話し手) から Hearer (聞き手) への言葉の投げかけの Scene (場面) の順序を表す。次の Speaker | Hearer 欄の A=B は, 両者の身分が等しいか上下の差別化がしにくい場合, A>B は, 話し手 A の方が聞き手 B の上位者の場合で, A<B はその逆の場合である。ここでの上下関係は言葉の投げかけの時点の立場であって, 必ずしも真の身分の上下関係とは限らない。その次の thou の欄には, 二人称主格単数形 þou, þu, þow, þw, -tu, -tou, -te が含まれる。thee の欄は, 二人称目的格単数形 þe のみである。thy, thine の欄には, 所有形容詞 þi, þy, þine, þin, 所有代名詞 þin, þine, 属格単数形 þin が含まれている。ye 欄から右は複数形で, ye は主格を sg. は個人を指し, pl. は複数人を指す場合である。you は目的格, your(s) には所有形容詞 y(o)ure, 所有代名詞 youres を含み<sup>16)</sup>, y(o)uself は再帰代名詞である。thou 欄から y(o)uself 欄の数字は, 二人称代名詞のそれぞれの形が現れる行数を表す。最後に, Speaker | Hearer の欄の略字に関しては次のとおりである。Ag: Angel (天使); At: Athelwold (England 王で Goldeborow の父親); AtM: Athelwold の家臣; Au: Audience (聴衆); Bd: Bernard (Denmark の代官で Ubbe の片腕); Bm: Bertram (Lincoln にある Godrich の居城の料理番); Bi: Birkabeyn (Denmark 王で Havelok の父親); Ch: Chester 伯; Ct: Christ (キリスト); El: (H)elfled (Hauelok の二人の妹の一人); EP: English people (イギリス人民); Gb: Goldeborow (Athelwold の娘); Gd: Godard (Denmark 王 Birkabeyn 死後の王位継承者 Havelok の摂政); GdM: Godard の家臣; Gr: Godrich (Cornwall 伯で England 王 Athelwold の死後の王位継承者 Goldeborow の摂政); GrM: Godrich の家臣; Gm: Grim (Havelok を養育した Denmark 人の漁師で Grimsby を築いた); Gunnild: Grim の二人娘の一人; Ha: Havelok (Birkabeyn 王の息子で後に England と Denmark の両王になる); Hu: Huwe Raven (Grim

の三人の息子の一人) ; La: Lad(s) の略で悪党 (ども) ; Le: Leve (Grim の妻) ; Leive: Grim の二人娘の一人 ; Ro: Roberd the Rede (Grim の長男) ; Swanborow: Havelok の二人の妹の一人 ; Ub: Ubbe (Denmark の大老で Godrich 征伐の立役者の一人) ; UM: Ubbe の家来 ; UW: Ubbe の妻 ; Wi: William Wenduth (Grim の三人の息子の一人)。

A List of the Second Personal Pronouns in *Havelok*

Scene	Speaker   Hearer	thou	thee	thy, thine	ye		you		y(o)ure(s)		y(o)u- self	Total
					sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.		
1	St=Au					11 12		3				3
2	At>AtM					159 161 168		160 169		171		6
3	Bi>Gd	388 392	384									3
4	Gd>Ha, Sw, El					454		453				2
5	Ha<Gd	486	489				484 485 490					5
6	Gd>Gm	527 527 528 532 534	529 530 531 533									9
7	St(monologue)		544									1
8	Gm=Le	559 560 578 582 584										5
9	Le=Gm	598										1
10	Gm<Ha	622 623 629	621 627 630 631	619 620 620								10
11	Ha>Gm	636										1
12	Le<Ha	641	642 645									3
13	Gm<Ha	662	661									2
14	Gm<Gd	668 677	678	676								4
15	Gd>Gm	681 684 685 688	686									

Scene	Speaker   Hearer	thou	thee	thy, thine	ye		you		y(o)ure(s)		y(o)u- self	Total
					sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.		
		689 690										7
16	St=Au					731 732						2
17	Gm<Ha	843 844 845 846 848 850 852 853 855 856	854	852								12
18	Bm>Ha	905 907 908	906									4
19	Ha<Bm					920		910 912				3
20	Bm>Ha	922	923 924									3
21	Gr>Gb	1119 1121 1122 1124	1123 1125	1128		1127						8
22	Gr>Ha	1135										1
23	Gr>Ha	1149	1150 1151	1152								4
24	Gr>Gb	1159 1161 1162	1160									4
25	GmS<Ha	1216 1218 1219 1220 1229 1229	1217 1226 1230 1235	1214 1228								12
26	Ag>Gb	1273 1274	1266	1265 1273								5
27	Ha=Gb	1283	1311									2
28	Gb=Ha	1316 1318 1318	1324 1344 1345	1315 1320 1330								

Scene	Speaker   Hearer	thou	thee	thy, thine	ye		you		y(o)ure(s)		y(o)u- self	Total
					sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.		
		1322 1331 1334 1337 1342 1348 1350 1351	1346 1347	1342								20
29	Ha<Ct	1384						1361				2
30	Ha>GmS					1402 1440		1401 1440 1441 1442	1416			7
31	Ha<Ub							1626 1628				2
32	St=Au					1641 1641						2
33	Ub>Ha	1661 1662 1663 1664	1660 1666	1659 1662 1663								9
34	Ub>Ha, Gb					1680						1
35	Ub>UW	1717										1
36	Bd>La	1773										1
37	Bd>La					1778		1783				2
38	La<Bd	1787		1789	1786							3
39	Ha>La							1799				1
40	La<Ha	1800										1
41	Hu=Ro&Wi						1881					1
42	Ub>Bd		1951 1952									2
43	Ub>Bd	2008										1
44	Ub>Ha	2069 2071 2074 2080 2081 2081	2065 2070 2072	2065 2066 2069 2075 2077 2084					2067			16
45	Ub<Ha	2174 2176 2177 2178 2180	2168 2171 2172	2169 2173								

Scene	Speaker   Hearer	thou	thee	thy, thine	ye		you		y(o)ure(s)		y(o)u- self	Total
					sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.		
		2186 2187										12
46	Ub>Um					2207 2208 2216 2251		2206		2211 2248		7
47	St=Au							2337				1
48	Rd<Gd	2390 2393 2393 2394 2396 2401 2401	2398 2402	2402								10
49	Gd>Gdm					2418 2419 2422 2424		2420 2424			2425	7
50	Ha>Ub		2518									1
51	Gr>Grm					2585 2593		2577 2578 2592			2595	6
52	Ha>Gr	2705 2707 2708 2708 2712 2715 2720	2704 2709 2718	2721								11
53	Gr<Ha	2726 2727	2724	2725								4
54	EP<Gb					2805		2799		2798 2801 2801		5
55	Ha>EP					2808 2809 2812 2817		2815				5
56	Ha>Ch	2862 2874 2882	2863 2864 2879 2880									7
57	Ha>Bm	2901	2915	2902								



Scene	Speaker   Hearer	thou	thee	thy, thine	ye		you		y(o)ure(s)		y(o)u- self	Total
					sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.		
		2903 2907 2912										6
58	St=Au					2984		2993 2994 2996				4
	Total	117	58	31	3	31	9	21	3	5	2	280

### III Havelok における二人称代名詞一覽の考察

本章では前章の一覽表の各場面の二人称代名詞を考察していく。考察に際しては、序論で紹介した Shimonomoto 氏の論文で取り扱われているように、呼び掛け語や命令法の使用があれば二人称代名詞の使用に影響があるかどうかを確認し、さらに二人称代名詞使用と何らかの関係があることも考えられるので一人称代名詞単数形の使用にも注意を払うことにする。これは、小林博士の「一人称古形 *Ic, Ich* は二人称古単 (*bu* 等) に、一人称新形 *I, Y* は二人称新単 (*ye* 等) に形影相伴う」(小林, 95) との主張を確認したいからである。

01. これは、語り手が聴衆に対してこれから Havelok の物語を語る旨を知らせている場面である。語り手は聴衆に関して objective case で plural (以下, obj.pl.) の *you* 1 回と nominative case (以下, nom.) pl. *ye* を 2 回使用している。一人称は *Ich* を使用している。
02. この場面では、England 王 Athelwold が、死の直前に集まった臣下に対してお礼と自分の死が近づいていることとそれに加えて自分亡き後の娘のことを案じている旨を述べる。同王は、nom.pl. *ye* を 3 回と obj.pl. *you, you* をそれぞれ 1 回と possessive adjective (以下, poss.aj.) pl. *yure* を 1 回使用している。一人称は *Y, I, Ich* を使用している。
03. ここでは、Denmark 王 Birkabeyn が、3 人の子供たちの後見人 Godard に Denmark 全土、全ての財産、3 人の子供を預ける旨を伝える。obj. singular (以下, sg.) *þe* 1 回と *þo[u]* を 2 回使用している。一人称は *I, Ich* を使用している。
04. 裏切りを思い立った Godard がその 3 人の子供たちに問い掛ける。obj.pl. *you* 1 回と nom.pl. *ye* 1 回を使用しているのは問題がない。小林博士<sup>17)</sup>は、453 行の *Hwat is you?* (MS: *Wat is yw?*) の *you* を nom.pl. と取られているが、この疑問文は *What is to you?* (= *What has happened to you?*) の意味で、この *you* は明らかに dative case (以下, dat.) pl. である。この類似表現として、l. 1951 に *Quoth Ubbe, 'Bernard, hwat is þe?'* と l. 2704 に *And seyde 'Godrich, hwat is þe...?'* があるが、それぞれの *þe* は dat.sg. である。また *you* が nom.pl. であれば l. 1778 の *And seyde, 'Hwat are ye...?'* のように *Hwat are you?* となるはずである。

05. ここでは、二人の妹を殺されて怖くなった幼い Havelok が悪魔のような後見人 Godard に命乞いをする。Godard に対して *obj.pl. you* が 3 回、*nom.sg. bu* と *obj.sg. be* がそれぞれ 1 回使用されているが、この場合の *obj.pl. you* は個人に対して使用される「敬意」を表す複数形と解される。表面的な「敬意」とは裏腹に、Havelok の心の中には「お前は父王の家臣であったではないか」という気持ちが常にあり、その心の表われが絶対絶命のこのときに単数形の使用につながったのであろう。呼び掛け語 *louerd* には *you* と *be* が対応している。一人称は *I* が使用されている。
06. Godard が漁師 Grim に Havelok を海に投げ込むよう依頼する。*nom.sg. bou* 2 回、*bu* 2 回、*tu* 1 回と *obj.sg. be* 4 回が使用されている。呼び掛け語 Grim には *bou* が対応している。一人称は *I* が使用されている。
07. 語り手が祈りの中で Havelok に言及している。上下関係の入る余地のない場面なので語り手が Havelok に対して一般の *obj.sg. be* を使用しているのは問題がない。呼び掛け語 Havelok には *be* が対応。
08. 漁師 Grim が女房の Leve に Godard から渡された Havelok の処分について話している。夫婦間の会話だから *nom.sg. bou* 4 回、*te* 1 回が使用されるのは当然である。命令法が *Wite bou…!* (1.559); *Ris up … an go bu binne*, (1.584) の形で 3 回現れる。一人称には *I* と *Ich* が使用されている。
09. 08 とは逆に Leve が Grim に話しかけている。*nom.sg. bou* が使用されている。
10. Havelok が Denmark 王になる世継ぎだと悟った Grim が Havelok の前にひれ伏して話しかける。*nom.sg. bou* 1 回、*bu* 2 回と *obj.sg. be* 4 回、*poss.aj.sg. pine* 3 回と全て単数形が使われている。この時点では、Havelok は上位者だが、「敬意」の複数形は使用されていない。Grim にとっては、Havelok がまだ幼少であり、保護すべき対象だからであろう。呼び掛け語 *Louerd* には *pine* (1.619) と *be* (1.627) と *bou* (1.629) が *Lowerd* には *be* が対応している。一人称には *I* が使用されている。
11. Havelok が Grim に話しかける件で、*nom.sg. bu* を使用している。Havelok は Grim のことを親代わりのように思っているので、「親しみ」を表す単数形を使用しているであろう。一人称には *Ich* と *Y* が使用されている。
12. 空腹の Havelok に Leve が食事を勧めている。*nom.sg. bu* 1 回と *obj.sg. be* が 2 回使用されている。ここも 10 と同じで Leve にとって Havelok は保護すべき対象なのだろう。呼び掛け語 *Louerd* には *be* が対応。一人称には *Y* が使用されている。
13. 疲れた Havelok に Grim が安心して休むように述べる。*nom.sg. bu* と *obj.sg. be* が使用されている。命令法は *Slep wel faste and dred be nouht* の形で単数命令形が 2 回現れる。

14. 裏切り家老 Godard に Grim が申し付けられたことを終了した旨を伝える。呼び掛け語 Louerd を用いた後に nom.sg. *bou*, *bu*, poss.aj.sg. *bi*, obj.sg. *be* をそれぞれ 1 回使用している。ここの単数形の使用は I 章の 5) の「個人の呼び掛けとしては *ye* よりも *thou* の方が普通である」が当てはまる。一人称には *Ich* が使用されている。
15. Godard が約束を反故にした上で、Grim を激しく非難する。nom.sg. *bou* 4 回, *tu* 2 回と obj.sg. *be* 1 回を使用している。一人称には *I* が使用されている。
16. 語り手が話の続きをする旨を聴衆に伝える件で、nom.pl. *ye* を 2 回使用している。
17. Godard が住む Denmark から England の Grimsby に逃げて来て、家族と Havelok を養っていたが、これ以上 Havelok に満足のいく賄いをする事ができないと思った Grim が Havelok に Lincoln に行って生活するように勧める。nom.sg. *bu* 4 回, *bou* 6 回と poss.aj.sg. *bi* 1 回と obj.sg. *be* 1 回が使用されている。一人称には *J*, *Y* が使用されている。
18. 故 Athelwold 王の元家臣で王の娘 Goldeborow の後見人として任ぜられた Cornwall 伯の Godrich の料理番 Bertram が Havelok を下働きとして雇う。nom.sg. *bu* 2 回, *tu* 1 回と obj.sg. *be* 1 回が使用されている。一人称には *Ich* が使用されている。
19. この時点では上位者の Bertram に Havelok が下働きとして働く旨を述べる。「敬意」の複数形 nom.pl. *ye* 1 回と obj.pl. *you* が 2 回使われている。一人称には *Ich*, *Y* が使用されている。
20. 19 とは逆に Bertram が下働きの Havelok に話しかける件で、nom.sg. *bu* 1 回と obj.sg. *be* が 2 回使用されているのは当然である。命令法は *Go bu yunder and sit pore* という形で 2 回現れる。一人称には *I*, *Y* が使用されている。
21. 悪魔のような後見人 Godrich が Athelwold 王の娘 Goldeborow に、この時点では素性のわからない Havelok と無理やり結婚せよと命じている。nom.sg. *bou* 4 回, obj.sg. *be* 2 回, genitive (以下, gen.) sg. *bin* 1 回と Havelok と Goldeborow の二人を指す nom.pl. *ye* を使用している。小林博士<sup>18)</sup>はこの l. 1127 の *ye* を個人を指すとしているが、誤読と言うべきであろう。一人称には *I* が使用されている。
22. Godrich が Havelok を呼んで来させて、女房が欲しいか尋ねる。nom.sg. *te* が使用されている。呼び掛け語 *louerd* には *bin* が対応している。一人称には *Ich*, *J* が使用されている。
23. 22 の後に双方のやり取りがあった後、Godrich は Havelok に自分の薦める女を娶らないと処罰するぞと脅す。nom.sg. *bou* 1 回, obj.sg. *be* 2 回, poss.aj.sg. *bin* 1 回が使用されている。一人称には *Y*, *I* が使用されている。
24. Godrich は、今度は Goldeborow を呼んで来させ、Havelok を夫として受け入れなければ処罰するぞと脅す。nom.sg. *bu* 1 回, *bou* 2 回, obj.sg. *be* 1 回を使用する。一人称に

は *J* が使用されている。

25. Goldeborow と Havelok は結婚後、Godrich の元を去り Grimsby へやって来るが、Grim はすでに死んでおり、代わりに Grim の 5 人の子供たちが Havelok に忠誠を誓う。nom.sg. *bou* 6 回, obj.sg. *be* 4 回, poss.aj.sg. *bi* 1 回, poss.pron.sg. *bin* 1 回が使用されている。命令法は *Bileue her* という形で 1 回現れる。呼び掛け語 *louerd* には *bin* が対応している。
26. Havelok が眠っているとき天使が Goldeborow に夫の Havelok は Denmark と England 両国の王になる運命であることを伝える。nom.sg. *bu*, *bou*, obj.sg. *be*, poss.aj.sg. *bi*, *bin* をそれぞれ 1 回使用している。命令法は *Goldeborw, lat bi sorwe be!* という形で現れる。呼び掛け語 *Goldeborw* には *bi* が対応している。
27. 眠りから覚めた Havelok が Goldeborow に自分が眠っているときに見た夢について語る。nom.sg. *bou* と obj.sg. *be* をそれぞれ 1 回使用している。呼び掛け語 *Lemman* には *bou* が対応し、*Goldeborw* には *be* が対応している。一人称には *J, Ich* が使用されている。
28. その夢の話聞いた Goldeborow が Havelok にすぐに答える。nom.sg. *bw* 1 回, *tow* 1 回, *bou* 9 回と obj.sg. *be* 5 回と poss.aj.sg. *bi* 1 回, *bin* 2 回, *bine* 1 回が使用されている。呼び掛け語 *Jesu Crist* には *bine* が対応している。一人称には *J, Ich* が使用されている。
29. Havelok が教会で十字架と Christ に呼び掛けて話しかける。懇請する場合に「敬意」の複数形 obj.pl. *you* を使用し、同意を求める場合は *Jesu Crist* と呼び掛けた後、nom.sg. *bou* を使用している。呼び掛け語 *Louerd* には *you* が対応し、*Jesu Crist* には *bou* が対応している。一人称には *Ich, Y* が使用されている。
30. Havelok が Grim の 3 人の息子 *Roberd, William Wenduth, Huwe Raven* に自分の身の回りで起こったこととこれからの決意について語る。nom.pl. *ye* 2 回, obj.pl. *you* 4 回と poss.aj.pl. *youre* 1 回が使用されている。呼び掛け語 *Louerdinges* は 3 人に対してだから、複数の *you* で対応している。一人称には *Ich, Y* が使用されている。
31. 180 行の欠落のすぐ後の場面で、故郷 *Denmark* に戻った *Havelok* は、大老 *Ubbe* に品物の販売許可を請う。この時点では上位者の *Ubbe* に obj.pl. *you* (敬意の複数) を 2 回使用している。小林説<sup>19)</sup>では 1. 1626 の *you* を nominative と取るが、objective と見るべきである。なぜなら、この行では *biseche* の前後どちらかに *Ich* が省略されているのであり (Skeat & Sisam (1967 刷) では *biseche* の後に *Ich* が補われている), *I beseech you now for leave of it* と解すべきだからである。一人称には *Ich, J, Y* が使用されている。
32. 語り手が聴衆に問い掛ける。nom.pl. *ye* を 2 回使用している。

33. 堂々とした対格で屈強な Havelok はそのような物売りにおさまるような男ではなく立派な騎士になれる人物だと思った Ubbe が、Havelok に語りかける。nom.sg. *bou* を 4 回、obj.sg. *be* を 2 回、poss.aj.sg. *bi* を 3 回使用している。命令法は Havelok, *haue bi bone!* の形で現れる。呼び掛け語 Havelok には *bi* が対応している。一人称には *Y* が使用されている。
34. Ubbe が Havelok に妻の Goldeborow と一緒に食事に来るように誘う件で、二人を指して nom.pl. *ye* を使っている。命令法は *Loke, þat ye comen baþe.* の形で現れる。一人称には *Ich* が使用されている。
35. Ubbe が自分の妻に語りかける。nom.sg. *bou* を使用している。呼び掛け語 Dame には *bou* が対応している。
36. リーダー格の悪党が Ubbe の家臣 Bernard に戸を開けるように叫んでいる。nom.sg. *bu* を使っている。悪党は Bernard が自分の上位者だとの自覚はない。
37. Bernard が悪党どもに誰何する。nom.pl. *ye* と obj.pl. *you* を使っている。一人称には *Ich* が使用されている。
38. Bernard からひどく非難された悪党どもの一人が、怒り狂って Bernard に言い返す。まず、nom.pl. *ye* を Bernard に対して使っているが、これは怒りを抑えて使われた「敬意」の複数と考えられなくはない。しかし、平静の場合であればともかく、このような緊迫した場面であれば決して使わない複数形を激怒のあまりついうっかり使ってしまったとも考えられる。あとは当然のことながら相手に対する「怒りの感情」を表す単数形 nom.sg. *bu* と gen.sg. *bin* を使っている。
39. Havelok が悪党どもの前に立ち足かかる。obj.pl. *you* を使っている。この 1. 1799 の *you* は、小林説<sup>20)</sup>のように悪党一人を指しているわけでもなく nominative でもない。Datheyt hwo *you* henne fle! (= Curse on anyone who flee you hence!) を見ればわかるように *you* は fle の目的語であり悪党どもを指す複数形である。一人称には *Y* が使用されている。
40. ここでは、悪党の一人が Havelok に言い返している。nom.sg. *bou* を使っている。
41. Havelok が深い傷を負いながらも大勢の悪党ども相手に戦っている姿を、駆けつけた Grim の息子の一人 Huwe が目の当たりにして、兄 Roberd と弟 William を探しながら二人に呼び掛ける。nom.pl. *ye* を使っている。Roberd, William と呼び掛けているので複数形の *ye* で受けるのは当然である。一人称には *Ich* を使用している。
42. Ubbe が悪党どもとの戦いの惨状を目の当たりにして、驚いて Bernard に事の次第を問いかける。obj.sg. *be* を 2 回使っている。

43. Havelok が悪党どもから受けた大きな傷で絶命するかもしれないと聞いた Ubbe が自分の片腕の Bernard に Havelok の状態を確認している。nom.sg. *bou* を使用している。Bernard と呼び掛け *bou* で受けている。一人称は *I, Y* が使用されている。
44. 傷が癒えた Havelok に Ubbe が今後の Havelok 夫妻のことを案じていろいろと提案する。nom.sg. *bou* 4 回, *bu* 2 回と obj.sg. *be* 3 回と poss.aj.sg. *bi* 4 回, *bine* 1 回, *bin* 1 回と poss.aj.pl. *youre* 1 回が使われている。この *youre* は Havelok と Goldeborow の二人を指しているのであり、小林説<sup>21)</sup>のように Havelok 個人を指しているわけではない。命令法は *Cum now forth with me* の形で現れる。一人称は *Y, J* が使用されている。
45. Havelok が故 Birkabeyn 王の世継ぎとわかった Ubbe が Havelok に忠誠を誓う。身分が上下逆転したにもかかわらず、使用される 12 個の二人称代名詞はすべて単数形である。ここでは Havelok がまだ Ubbe の保護の下にあると考えられているからであろう。nom.sg. *bu* 2 回, *bou* 3 回, *tu* 2 回と obj.sg. *be* 3 回と poss.aj.sg. *bi* 2 回を使っている。命令法は、否定命令形が *Louerd, ne dred be nowht!* の形で現れる。呼び掛け語 *Louerd* に *be* が対応している箇所が 2 箇所ある。一人称には *J, Y* が使用されている。
46. Ubbe は家臣や民衆を呼び集め、彼らに Havelok のこれまでの苦労を伝えた後、彼こそが Denmark 王に相応しい人物なので臣従の誓いを立てるよう告げる。nom.pl. *ye* 4 回と obj.pl. *you* 1 回と poss.aj.pl. *youre* 2 回を使っている。いずれの複数形も家臣および民衆を指している。一人称には *Ich* が使用されている。
47. 語り手が Havelok の王の即位等を聴衆に話しかけている。obj.pl. *you* が使われている。一人称には *I* が使われている。
48. 晴れて Denmark 王となった Havelok から他の二人の弟と共に騎士に叙せられた Roberd (故 Grim の長男) が、卑劣漢 Godard を田舎道で見つけ出して呼び掛ける。Godard は、Birkabeyn 王から Havelok と二人の娘御の後見人役を仰せつかりながら、王の死後、それを反故にして好き勝手に振舞っていた。nom.sg. *bu* 7 回<sup>22)</sup>, obj.sg. *be* 2 回と poss.aj.sg. *bi* 1 回の単数形を使っている。
49. Roberd の威嚇や Roberd の二人の弟と 5 人のつわものが、Godard の一番の家来を 10 人も殺した様子を見て、逃げ出そうとしている他の家来達に対して Godard が大声で呼び止める。nom.pl. *ye* 4 回と obj.pl. *you* 2 回と refl.pl. *youself* 1 回を使っている。命令法は *and late ye nouth mi bodi spille* の形で現れる。Mine knihtes と呼び掛けて *ye* で受けるのは当然である。一人称には *Ich* が使用されている。
50. 卑劣漢 Godard が絞首刑に処せられ、彼が所有していた一切のものがことごとく Havelok の手に召し上げられた後、Ubbe に一切を譲り与える旨を伝える。obj.sg. *be* を 1 回使っ

- ている。一人称には *Ich* が使われている。
51. ところ変わって、England の卑劣漢 Godrich は自分を討つために Denmark からやって来た Havelok 軍を迎え撃とうと国中の家来を集め、彼らに自分に続いて来るよう檄を飛ばす。nom.pl. *ye* 2回と obj.pl. *you* 3回と refl.pl. *yuself* 1回を使っている。一人称には *Ich* が使われている。
52. いよいよ Havelok と Godrich の一騎打ちの場面で Havelok が Godrich に大声で叫ぶ。nom.sg. *bou* 5回, *bu* 2回と obj.sg. *be* 3回と poss.aj.sg. *bi* 1回を使っている。Godrich と呼び掛けて *be* と *bou* で受けている。一人称には *Ich, Y* が使われている。
53. 今度は Godrich が Havelok に言い返す。nom.sg. *bou* 1回, *bu* 1回と obj.sg. *be* 1回と poss.aj.sg. *bi* 1回を使っている。一人称には *Ich, J* が使われている。
54. Havelok が Godrich を容赦なく不具にして捕らえた後、そこに連れて来られた Goldeborow の面前に Godrich に率いられていた England 勢が全員諸膝ついて痛恨の涙を流し、彼女に赦しを請う。ここではすべて「敬意」の複数形が使われている。nom.pl. *ye* 1回と obj.pl. *you* 1回と poss.pron.pl. *youres* 2回である。
55. England 勢が皆、Goldeborow に対して後悔し赦しを請う様子を見た Havelok が彼らに答えて言う。nom.pl. *ye* 4回と obj.pl. *you* 1回が使用されている。一人称には *Ich* が使われている。
56. Havelok が全てのイギリス人から臣従の誓いを受けた後、その中の一人で独身で若い騎士の Chester 伯とその家来を呼び寄せて Chester 伯に Grim の娘 Gunnild を妻として娶るように勧める。nom.sg. *bou* 1回, *bu* 1回, *bu* 1回と *be* 4回を使っている。一人称には *Ich, J* が使われている。
57. Havelok が、今度は、もと Godrich の料理番であり Havelok の恩人でもある Bertram に対して Grim の娘 Levice を娶るように勧める。nom.sg. *bou* 1回, *bu* 1回, *tu* 2回と obj.sg. *be* 1回と poss.sg. *bi* 1回を使っている。一人称には *Y, Ich* が使われている。
58. Havelok 物語のまとめを語り手が聴衆に語る。nom.pl. *ye* 1回と obj.pl. *you* 3回を使っている。一人称には *Ich* が使われている。

#### IV 結 論

まず、前2章で明らかになったことを確認しよう。ひとつは、Scenes 3, 6, 11, 15, 18, 20, 21<sup>23)</sup>, 22, 23, 24, 26, 33, 35, 42, 43, 44<sup>24)</sup>, 50, 52, 56, 57からわかるように、上位者から下位者(個人)に言葉をかける場合は、必ず単数形が用いられる。第2は、Speaker が上位者であろうと同等の者であろうと身分とは無関係に、Hearer が複数人いれば、必ず複数形を使うと

いうことである<sup>25)</sup>。Speaker が上位者の場合は, Scenes 2, 4, 30, 34, 37, 39, 46, 49, 51, 55 であり, 同等の者の場合は, Scenes 1, 16, 32, 41, 47, 58 である。

第 3 に, *Havelok* においては, 二人称斜格複数形 *you* の主格使用および主格複数形 *ye* の斜格使用は観察されないということもわかった。

第 4 に, 「敬意」の複数形の使用範囲が, Scenes 5, 19, 29, 31, 54 から, 下位者が上位者にへりくだってって懇請する場合のみに制限されていることがわかる。この点は, Shimonomoto 氏<sup>26)</sup>の *Canterbury Tales* で調査された結果と大いに異なっている。氏の調査によれば, 騎士の生活や上流社会, 特に *courtly romance* を扱った話においては, 恋人同士や夫婦間で相手に呼びかける時に使われる二人称代名詞は複数形である。Franklin's Tale (『郷土の話』) では, 個人を指すのに使用される二人称代名詞の 4 分の 3 が複数形である。この *Havelok* と *Canterbury Tales* における「敬意」の複数形の使用頻度の違いは, 恐らく次のような理由からであろう。個人に対して「敬意」の複数形を使用する習慣はフランスから入ってきたと言われるが<sup>27)</sup>, *OED* によると, その初例は 1297 年である。ということは, *Havelok* が書かれた頃は「敬意」の複数形を使う習慣が England に入ってきた当初で, その習慣がまだ一般化していなかったと考えられる。そういうわけで, *Havelok* では「敬意」の複数形の使用が限定的でその頻度が低いのであろう。ここで話を本段落の始めに戻そう。Scene 38 の l. 1786 の *ye* の 1 例のみが, 本来の「敬意」の複数形ではない。III 章の考察 38 でも述べたように, 怒りを抑えて皮肉っぽく使ったか, あるいは, 激怒のあまり我を忘れ, ついうっかり使ってしまったのであろう。もしそうでなければ, 複数形が「敬意」以外にも個人に対して使用されはじめたことになる。しかし, 二人称の単数形と複数形の交代移行を安易に無差別な使用であると判断してしまわないで, 話し手が単数形と複数形を交錯することによって, 話し手の複雑な心理を伝えている (菊池, 244) と解釈したい。

さらに, 呼び掛け語の二人称代名詞使用への影響は, 個人には単数形のみが使用されていることから, 無いと言える。命令法も強調で個人に対して主格単数形, 複数人に対して主格複数形が使用されるのみで, 二人称代名詞使用には影響を与えないこともわかった。

最後に, 小林博士が主張されるように, 一人称主格単数形の古形 *ic, ich* が威厳を示し, 新形 *I, y* がへりくだったり, 遠慮する場合に使用され, 従って, 二人称代名詞使用に影響を与えたかどうか。明らかに逆の使用が Scenes 6, 14, 15, 21, 23, 24, 33, 39, 43, 44 において認められたり, 他の Scene でも古形と新形の混用が多数見受けられることから, その影響については明言できない。



## Notes

- 1) *Havelok the Dane* は、1300年頃 England 中部地方北東部方言で書かれた中英語ロマンスの最も初期のものである。3001行から成るこの物語は、基本的に1行に4強勢を置く押韻の二行連句である。現存する唯一の写本は Oxford 大学の Bodleian Library に所蔵されている。物語の大筋は以下のとおりである。Havelok は Denmark 王 Birkabeyn の息子で世継ぎである。Elfred と Swanborow という2人の妹がいた（二人とも Godard に殺される）。Havelok は、Birkabein 王から Havelok の摂政に任じられた悪人 Godard に王の死後、王位継承権を奪われるが、漁師の Grim に育てらる。Grim には妻 Leve, 2人の娘 Gunnild と Leve, それに3人の息子 Huwe Raven, Roberd the Rede と William Wenduth がいる。後に Havelok は、Grim 一家と一緒に England に逃れ、Cornwall 伯である Godrich の Lincoln にある居城の料理番 Bertram の下働きになる。ところで、Godrich は England 王 Athelwold の娘 Goldeborow の後見人に任じられるが、Athelwold 王が死ぬと、やはり王位継承権を Goldeborow から奪う。その後、Goldeborow は Havelok と結婚し、やがて、彼らは Grim の息子たちや Denmark の大老 Ubbe などの援助をもらって Godard と Godrich を殺して、彼らの権利を奪還する。そしてついに Havelok は Denmark と England 両国の王になるのである。
- 2) 小林智賀平「*Havelok* における *pu, Tu, You* の研究」
- 3) 菊池清明「*SIR GAWAIN AND THE GREEN KNIGHT* における二人称代名詞 *YE* と *THOU* の交代移行について」
- 4) Shimonomoto, Keiko. 「*THE USE OF YE AND THOU IN THE CANTERBURY TALES*」
- 5) *OED* の *thou* の項；荒木ほか, p.297.
- 6) *OED* の *thee* の項。
- 7) *OED* の *thy* の項。
- 8) *OED* の *thine* の項。
- 9) *OED* の *ye* の項；中尾, p.84; Brunner, p.481.
- 10) 菊池, p.234.
- 11) *OED* の *you* の項；Mustanoja, p.127.
- 12) *OED* の *your* の項。
- 13) *OED* の *yours* の項。
- 14) *OED* の *youself* の項。
- 15) 小林, pp.68-70.

- 16) *Havelok* には属格複数は出てこない。
- 17) 小林, pp.65, 90.
- 18) 小林, p.82.
- 19) 小林, pp.66, 90.
- 20) 小林, pp.67, 90.
- 21) 小林, p.82.
- 22) 但し, 2401行の二つの þu は共に vocative。
- 23) 1.1127行の ye は二人を指している。
- 24) 1.2067行の ye は二人を指している。
- 25) ここにあてはまる「下位者」の Speaker の例は *Havelok* には現れていない。
- 26) Shimonomoto, p.15.
- 27) Mustanoja, p.126.

## References

(本文及び注では、便宜上 [ ] の中のように略記して使用することがある。)

### Texts:

- French, Walter Hoyt and Charles Brockway Hale, eds. *Middle English Metrical Romances*.  
vol.1. pp.73-176 (*Havelok the Dane*). New York: Russell & Russell. Inc., 1964.  
[French 版]
- Skeat, W. W., ed. *The Lay of Havelok the Dane*. EETS, ES.4. 1868; rpt. New York: Kraus  
Reprint, 1981.
- Skeat, W. W., ed. *The Lay of Havelok the Dane*. 2nd ed. rev. by K. Sisam. Oxford: Clarendon  
Press, 1915; imp. 1967. [Skeat & Sisam 版]
- Smithers, G. V., ed. *Havelok*. Oxford: Clarendon Press, 1987. [Smithers 版]

### Dictionaries:

- Kurath, H., et al, eds. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: University of Michigan Press,  
1956-2001.
- Murray, James A. H., et al. 1st ed. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Prepared by J. A.  
Simpson and E. S. C. Weiner. Oxford: Clarendon Press, 1989. (*OED*)
- Toller, T. Northcote, ed. *An Anglo-Saxon Dictionary*. 2 vols. Based on the manuscript  
collections of J. Bosworth. Oxford: OUP, 1898; rpt. 1980.

Works:

- 荒木一雄, 宇賀治正明『英語史ⅢA』英語学体系第10巻 大修館書店 1984。[荒木ほか]
- Baugh, Albert, et al. *A History of the English Language*. 3rd ed. London: Routledge & Kegan Paul, 1978: rpt. 1981<sup>2</sup>.
- Bradley, H. *The Making of English*. 1904; rpt. London: Macmillan & Co. Ltd., 1951.
- Brunner, Karl. *Die Englische Sprache: Ihre Geschichtliche Entwicklung*. trans. by Tamotsu Matsunami, et al. Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1977. [Brunner]
- Hogg, Richard M., et al. *The Cambridge History of the English Language*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part II. Syntax Vol.I*. London: George Allen & Unwin Ltd., rpt. 1974.
- 菊池清明「*SIR GAWAIN AND THE GREEN KNIGHT* における二人称代名詞 YE と THOU の交代移行について」『英文学研究』58(2) 日本英文学会編 (1981) : pp.233-46. [菊池]
- 小林智賀平「*Havelok* における *pu, Tu, You* の研究」三輪伸春 (編)『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」』第44号 (1996) 別冊. [小林]
- Mossé, Fernand. *A Handbook of Middle English*. trans. by J. A. Walker. Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, 1961.
- Mustanoja's Middle English Syntax*. Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1985. [Mustanoja]
- 中尾俊夫『英語史Ⅱ』英語学体系第9巻 大修館書店 1972. [中尾]
- 中島文雄『英語発達史』改訂版 岩波全書143 岩波書店 1981.
- 小野茂, 中尾俊夫『英語史Ⅰ』英語学体系第8巻 大修館書店 1980. [小野ほか]
- Shimonomoto, Keiko. *The Use of Ye and Thou in the Canterbury Tales and Collected Articles*. Tokyo: Waseda University Enterprise Corp., 2001. [Shimonomoto]
- Sweet, Henry. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. revised thoroughly by Norman Davis. 9th ed. Oxford: Clarendon Press, 1980.

## On the Second Personal Pronouns in *Havelok the Dane*

SATO Tetsuzo

### Synopsis

My aim in this paper is to examine all the instances of the second personal pronouns in *Havelok the Dane*, one of the metrical romances popular in England between 1200 and 1500, written in rhyming couplet in the Northern Midland dialect of English circa 1,300, and to make clear how their singular and plural forms are used.

In Chapter I, I make a general survey of the developing process of the second personal pronouns. In Chapter II, I set out all the instances of the second personal pronouns in a list. In Chapter III, the list is examined thoroughly.

The conclusions are as follows: Firstly, when a high-ranking person (or a superior) addresses a low-ranking one (or an inferior), the singular forms are exclusively used. Secondly, any speaker, regardless of his or her rank, addresses more than one hearer in the plural forms. Thirdly, *ye* is not used as the objective singular or plural in *Havelok*, while *you* appears neither for the nominative *ye* nor for the objective or nominative singular. Lastly, when someone addresses another in the plural forms, they are mostly used by an inferior to a superior, in order to request permission, beg one's life, or implore forgiveness.